

## 熊本市におけるカーネーションの実態調査

## (第1報) 施肥の実態と作柄について

東 隆夫・蟹江 定・兼武 耕一郎

(熊本県農業試験場)

HIGASHI, T., KANIE, M. and KANETAKE, K.

Practical Survey of Carnation Culture in Kumamoto City

## (I) Fertilization and crop conditions.

## 1. はじめに

熊本市は古くからのカーネーション栽培地である。戦後まもなく田迎地区を中心に栽培面積は増加の一途をたどり、現在約5haにおよんでいる。

ここでも他産地と同様に連作による生産力低下と、共同出荷に伴う品質の均一化が問題となっている。そこで産地の実態を把握すると共に、生産力低下の原因を究明し生産力の増大を図るため実態調査を行ないこれらの点について検討した。

カーネーションの生産力に関係する要因は多く挙げられるが、中でも肥培管理による場合が最も大きい要因であった。そこでこの点をとりまとめ第1報には施肥の実態と作柄について、第2報には土壌の化学性と根の分布について報告する。

## 2. 調査方法

(1) 調査方法と点数 調査地域は熊本市街地から南東に位置した白川沖積の平地で、ここは水田地帯であるが自然堤防によって畑となっており、カーネーションが栽培されている。調査地区は出水、田迎、出仲間、下近見、高江、画図、田井島、良町、御幸の9地区で合計117点、調査対象面積4.7×7ha(ハウス実面積)である。

(2) 立毛調査 収量の実態は握は極めて困難と考えられるが、収量=品質×収穫本数、の考え方から、品質査定と収穫有効本数を調査した。品質査定は9人の審査員によって10点法で採点し、その平均値を品質とした。有効収穫本数は1ハウスについて無作為に1ヶ所5株づつ3ヶ所を調査、その1株当りの平均値を有効収穫本数とした。なお調査は花そろいの良い3月15日、16日に行なった。

(3) 聞取り調査 4月5日、6日聞取り可能な範囲

内で調査を行ない、後に補足調査を数回行なった。

## 3. 調査の結果

(1) 施肥の実態 (ア)施肥量(10a当たり)Nは元肥0~20kg, 追肥10~50kg, 全量30~80kgに全調査例の約60~70%が分布しており、 $P_2O_5$ はNに比し分布の中が広く、元肥0~70kg, 追肥10~100kg, 全量20~140kgに約60~70%分布していた。又 $K_2O$ はNに大体類似した分布を示した。なおN、 $P_2O_5$ 、 $K_2O$ の共通した特長は元肥無施用出發が20~25%もあり、最も多い分布を示したことである。(イ)追肥回数、地区間に差が認められ多い地区で6~7回、少ない地区で3~4回、全体の平均は5.3回であった。(ウ)肥料の種類、三要素の施肥成分割合はN 26.9%、 $P_2O_5$  40.5%、 $K_2O$  32.6%で、Nは有機質肥料と高度化成が主として用いられ、 $P_2O_5$ は有機質肥料、高度化成と単肥の三者が主体となっていた。又 $K_2O$ は高度化成と単肥が主体をなし、有機質肥料で施す量は極めて少なかった。(エ)堆肥および石灰の施用量、堆肥の全農家戸数に対する施肥割合は極めて少なく、わずか16.2%でその施用量は10a当たり約2.5tであった。石灰は約64%の農家が施しており、その施用量は約160kgであった。

(2) 施肥量と品質の関係 施肥量が品質におよぼす影響はNが最も大きく、品質7.1以上の優品は80kg/10a以下に80%が分布し、 $K_2O$ はNに次いで影響が大きく $P_2O_5$ では全く影響がみられなかった。又有機質肥料と化学肥料の施肥割合からみると、優品は有機質肥料の施肥割合50%以上に70%が分布し、優品の割合は施肥量が多くなるに従って大きかった。

(3) 品質と有効収穫本数との関係は  $y = 3.185 + 25.67x$  の相関関係が認められた。